

第6号

発行日：平成10年9月16日
発行者：医学部広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学医学部広報紙

医学部ウォーカー

- 1面：弘前国際医学フォーラム盛會裡に終了
 - 2面：弘前医学投稿規定
 - 3面：客員外国人研究者紹介
 - 4面：研究室研修座談会
 - 5面：学生の国際交流
 - 6面：ジャマイカ保健強化プロジェクト
 - 7面：宇野良治助手受賞
 - 8面：Cutting Edge
- 題字 医学部長 遠藤正彦氏筆

一般講演風景



午前八時四十五分より遠藤正彦会長の開会挨拶、吉田豊学長の歓迎の辞があり、シンポジウムが開始された。Thomas Jefferson UniversityのJ. Uitto博士による「特別講演」皮膚基底膜領域の分子遺伝学―表皮水疱症についての基礎的研究と臨床的つながり―が行われ、熱心な討議がなされた。コヒーブレイクの後に、「遺伝子診断」のセッションが始まりBoys Town National Research HospitalのW.J. Kimberling博士の基調講演「遺伝子診断」に引き続き四題の一般講演が行われた。午前中はあいにく小雨混じりの天気、参加者がやや少ないものの、会場では英語による活発な討論が交わされた。

昼食のあと、午後一時十五分より「遺伝子発現と分化」のセッションが始まった。午前と違って会場は多くの聴衆が集まり活気に溢れていた。Harvard Medical SchoolのJ.A. Majumdar博士の基調講演「副腎皮質刺激ホルモン放出ホルモン（CRH）―ノックアウトマウスから得られたCRHの調節と課題の新知見」に続いて一題の一般講演が行われた。「遺伝子発現と分化」のセッションは、英語による活発な討論が交わされ、功実行委員長より閉会の挨拶が行われ今回のフォーラムが終了した。また、コヒーブレイクの時間に行われた十三のポスター演題についてはなかなかの雰囲気の中で活発な討議が行われた。

第2回 弘前国際医学フォーラム 盛會裡に終了

メディカルコミュニケーションセンターにおいて「分子医学」をテーマに第二回弘前国際医学フォーラムが七月七日に開催された。今回は遺伝子診断、遺伝子発現と分化、遺伝子治療の分野で世界的な研究を進展に促している医学研究者による講演と一般講演、ポスター講演が行われた。特別講演の司会を橋本 功実行委員長、各セッションの司会を基調講演を行ったゲストスピーカーと実行委員である私、須田俊宏教授、土田成紀教授、八木橋操六教授が担当した。

開会式の模様



功実行委員長より閉会の挨拶が行われ今回のフォーラムが終了した。また、コヒーブレイクの時間に行われた十三のポスター演題についてはなかなかの雰囲気の中で活発な討議が行われた。

会理事長の乾杯の音頭でなごやかな歓談が始まった。次に、実行委員長と鶴岡会理事長より招待講演者へ記念品の贈呈があり、それぞれの演者から挨拶をいただいた。懇親会も旧交を暖めたり、研究の話題などで盛り上がり、瞬く間に時間が過ぎ、土田成紀委員長より閉会の挨拶があり散会となった。

第二回弘前国際医学フォーラム実行委員会は昨年三月より活動を開始した。委員会は何度開催されたか記憶にないくらいであったが、幸いなことに前回のフォーラムの資料が整った。

このフォーラムを契機として、われわれは医学部の国際交流をこれまで以上に盛んにし、学部の活性化へ向かってよりいっそうの努力をしなければならぬと思われた。また、このように有意義な会は五回だけにとどまらず、永続的に開催されることが医学部にとつて必要ではないかと考えられた。そのためには全てのフォーラムの実績をもとにして公的な経済的援助の獲得が必要不可欠である。今回の会議も第一回に引き続き盛會となったが、学内外から質の高い講演をいただいた先生方へ、また、会場設営、進行など多くの関係者各位へ、さらに経済的援助を賜った方々へ心より御礼を申し上げたい。

当日の学術講演の内容は、オランダのElsevier社から英文プロシーディングとして、近く発行される予定である。（新川 記）

医学部長寄稿

卒業生を本学に留めるために

医学部長 遠藤 正彦

青森県以外の他県で当医学部出身者の、学会のシンポジストとしての活躍や、他大学教授への就任や、医師会役員としての活躍や、医学以外の音楽等での活躍等を新聞や学会誌等で知ったとき、当医学部関係者は誰でも一様に嬉しいに違いない。当医学部の卒業生が思い思いの土地で、それぞれの領域で活躍することは、至極当然であり喜ばしいことである。とは言え当医学部の卒業生が、あまり母校に残らずに、当医学部の教育・研究・診療に支障をきたし、更に地域医療に支障をきたしている現状をよしとするわけにはゆかない。このように卒業生が母校に留まるのが少ないというのは当医学部固有の問題ではなく、東京、名古屋、大阪を中心とした太平洋ベルト地帯から遠隔の人口過疎県

の医学部に共通の問題である。日本における人口と経済力の大都市集中化は、大都市と地方との様々な地域間格差をもたらし、その一つに、教育レベルの格差は、大都市より遠隔の医学部に大都市出身の入学者を多くし、地元出身者の入学を圧迫している。また、経済力の格差故に、大都市圏に設備や人材面から質の高い大病院が多数集中している。これらの病院群の、地方大学からの研修医を始めとした若い医師の吸引力はすさまじい。結果は言うまでもなく、医師の大都市集中と地方の医師過疎化である。

かつてのアンケートでは、当医学部の卒業生が母校に残らない理由として、出身地に戻りたいという帰郷の念や両親や家族との関わりを理由としているのはうな

ものに欠けていることは否めない。しかし、当医学部のスタッフの少なさは、忙しいだけであって、教育・研究・診療を手薄にし、その悪循環を繰り返していることも事実である。

今医学部は卒業生を留めるために、種々、特に大学院において手を尽くしている。大学院の入学枠の多様化、勤務しながら学ぶ社会人入学、研究がまとまれば一年早く修了できる大学院の修業年限の短縮、ティーチングアシスタントやリサーチアシスタントの活用、また他県に在る卒業生に対する母校に戻るよう勧める手紙作戦等々である。しかし、一人でも多くの学生諸君を母校に引き留めるには、今活発に討議を進めている「医学部二十一世紀構想検討委員会」下の「魅力ある医学部作り委員会」に期待している。あらゆる教官層と大学院生・学生が加わったこの委員会に、魅力ある弘前大学医学部への変身と二十一世紀の弘前大学医学部の夢を託したい。

「弘前医学」

投稿規定の改訂について

弘前医学編集委員長 元村 成



かねてよりの懸案であり、先号の医学部ウオーカー五号で部分的にお知らせしましたが、新しい「弘前医学」投稿規定が完成しつつありますので、改めてお知らせ致します。

新しい「弘前医学」投稿規定は、現在やや遅れ気味ですが、九月発行予定の「弘前医学」第五十巻一号に掲載予定です。七月十三日の平成十年度第二回弘前医学編集委員会検討承認され、七月二十二日の教授会に諮りましたので、現在、個別的なご意見を伺い、字句等の訂正を行って、九月十六日の教授会で最終的に承認頂く予定です。

一、投稿の資格を明記しました。
過去の経緯は多々あったと聞き及んでおりますが、現在「弘前医学」は弘前大学医学部・弘前医学会が発行元となっております。発行には公費が充てられておりますが、大学の紀要とは異なること、弘前医学会（日本学術会議に登録されてい

る学会）の学会誌でもあること、等々を考え、学会誌としての筋を通して、「原則として弘前医学会会員に限る」と致しました。あくまで原則ですので、学会会員外の方の投稿を拒否するものではありません。編集委員にご相談下さい。

二、全ての論文は編集委員及び医学部教官によって査読される。

査読はこれまで編集委員を中心に三名で行ってきましたが、四月よりすでに二名での査読を実施しております。又、編集委員に限らず、医学部教官に査読をお願いすることになりました。何卒よろしくご協力下さい。

尚、査読の結果、大なり小なり修正が要求されました場合、速やかに修正原稿を、査読意見に対する返事と共に提出下さい。現在、非常に多くの論文が、査読返却後に戻ってきておりません。指導教官の先生、論文校正責任者の先生方のご指導よろしく願います。

三、原稿は全てA4判の用紙を使用する。

これまで和文原稿はB5判、英文原稿はA4判、更に、和文論文に添付する英文抄録（Abstract）はA4判と統一されていませんでした。官公庁の書類もA4判に統一されていますので、「弘前医学」の論文原稿は全てA4判とします。A4

判用紙の周囲余白を上下左右とも二・五cm以上あげ、一ページあたりの字数は、和文論文の場合は二〇×二〇行四〇〇字、英文論文の場合はダブルスペースで二五行以内とします。原稿の長さはおよそその目安は設けますが、特に規制は致しません。但し、超過ページについては投稿料を徴収します。

四、原稿を作成する時の書体を和文では原則として明朝体、英文では一・二・四ポイントの読みやすい書体（例えばTimes）とする。

特に、和文でのゴシック体、英文での太い書体は避けて下さい。

五、原稿にページ番号を入れる。

表紙ページから下辺中央に印字する。

六、図の説明文（Figure Legends）を図とは離して別の用紙にまとめて記載する。

図（写真）は特に台紙に貼ったりせずに、裏に著者名、論文題名、上下を示す矢印を鉛筆で記して提出して下さい。

七、表紙に原稿の各枚数を記入していただいていますでしたが、その部分を削除しました。

八、度量衡の単位は原則として国際単位（SI）を用いピリオドをつけない。

厳密な適用をすぐに実施するわけではなく、慣用としての単位はそのまま残し

ます。

九、文献の記載方式をVancouver Styleとし、著者名は七名まで記載する。

文献は引用順に該当箇所の右方に片括弧で番号を付け、本文末尾に一括する。記載方式は著者名、標題、雑誌名、発刊年、巻、ページの順とし、省略のピリオドは打たず、句読点に注意する。

十、倫理規定と統計の項目を設けた。

投稿にあたってはこれが遵守されていないければ論文を受理しない。

十一、弘前医学会抄録も「弘前医学」投稿規定を遵守して記載する。

先号でお知らせの通り、次回の第一二八回例会（十月三十日（金）午後、現在演題募集集中）から適用します。演題申し込み時に抄録作成要領が配布されますので、それに沿って作成の上、例会当日ご提出下さい。そのまますでにご注意下さい。弘前医学会抄録のフロッピーディスクでの提出は当分見送らせて頂きます。

以上が今回の主たる改訂点ですが、詳しくは五十巻一号の新しい投稿規定を参照下さい。あまり堅苦しくは考えず、実体に合わせて、臨機応変に対応したいと思っておりますが、論文投稿で守るべき最低限の常識があると思えますので、指導教授、指導教官の先生方のご指導をよろしく願っています。

番外（一）編集委員から論文投稿にあたり、英文論文および英文抄録は必ず英文チェックをうけてから投稿するよう強い要請があります。

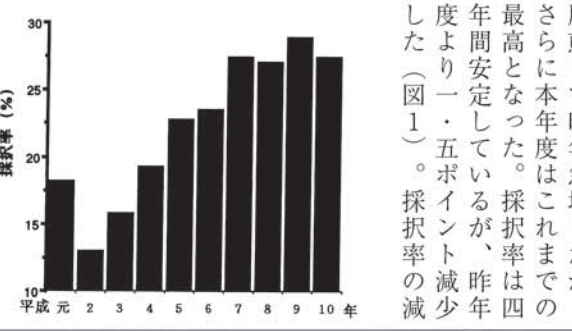
また、現在、弘前大学医学部にはMedical English Center (MEC) が設置され大活躍中です。是非、MECにてチェックを受けてから投稿なさることをお勧めします。

番外（二）「弘前医学」五十巻を記念して「弘前医学」の装丁を一新してはどうか、というご意見が多数寄せられております。当面の案は、現在B5判の雑誌をA4判にし、表紙のデザインを一新するというものです。近々に正式に編集委員会に諮り、五十一巻一号を目標に、表紙のデザイン等を募集したいと考えております。よろしくご協力下さい。

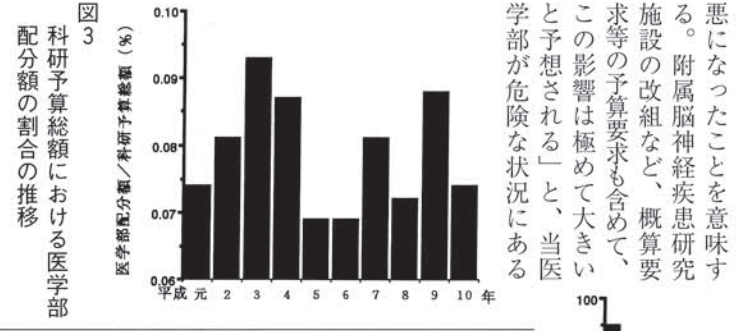
科研・危険・苦言・怪訝・沽券

—— 文部省科学研究費補助金交付される ——

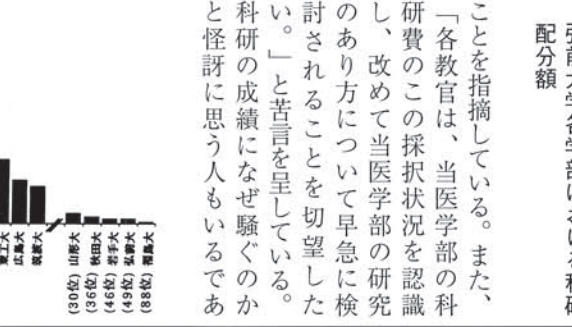
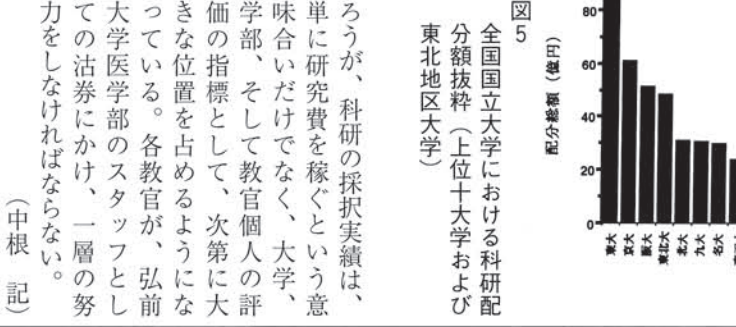
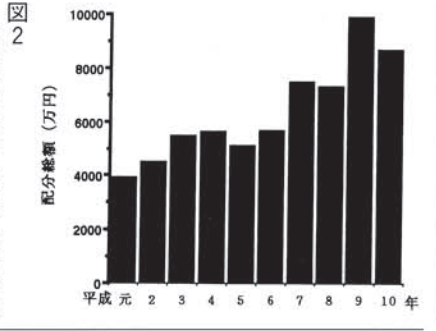
平成十年度文部省科学研究費補助金の採択・交付が行われた。弘前大学医学部・附属病院では特定領域研究二件、基盤研究（A）二件、基盤研究（B）十件、基盤研究（C）十八件、萌芽的研究三件、奨励研究（A）十八件、国際学術研究一件、の計五十四件で、配分総額は八、三六〇万円であった。申請件数は遠藤医学部長の肝煎りで昨年急増したが、さらに本年度はこれまでの最高となった。採択率は四年間安定しているが、昨年度より一・五ポイント減少した（図1）。採択率の減



では最下位である。遠藤医学部長が六月に出された「弘前大学医学部の平成十年度文部省科学研究費補助金の採択について」の報告によると、今年度は、東北・北海道地区医学部・医科大学（附属病院分は除く）九校の中で、配分総額・採択件数とも当医学部は最下位であった。報告書の中で遠藤医学部長は「他の医系大学の最下位に位置することは、文部省の当医学部に対する評価が、最悪になったことを意味する。附属脳神経疾患研究施設の改組など、概算要求等の予算要求も含めて、この影響は極めて大きい」と予想される」と、当医学部が危険な状況にある



少に伴い、総配分額も昨年度実績を下回っている（図2）。ここ五・六年、文部省科学研究費補助金の予算額が急増しているが、全体の予算額の比率からすると、今年度は、ここ十年間の当医学部の実績の中では、低調であった（図3）。弘前大学のなかにおいて医学部は、抜群の配分総額（図4）・採択件数は示しているが、全国的に見ると弘前大学の成績は良くない。配分総額は国立大学の中では四十九位と、丁度中間に位置するものの（図5）、医学部を有する総合大学の中



ろが、科研の採択実績は、単に研究費を稼ぐという意味合いだけでなく、大学、学部、そして教官個人の評価の指標として、次第に大きな位置を占めるようになっていく。各教官が、弘前大学医学部のスタッフとしての沽券にかけ、一層の努力をしなければならぬ。（中根 記）

松浦 博先生(昭和五十七卒)が滋賀医科大学教授に!!
就任の挨拶

滋賀医科大学生理学第二講座 松浦 博



昭和五十七年卒業の松浦博と申します。長らくの御無沙汰をお詫び申し上げます。平成十年四月一日付で佐賀医科大学生理学講座助教授から滋賀医科大学生理学第二講座教授へと異動になりました。棟方昭博第一内科教室教授からご挨拶の機会を与えられましたので、自己紹介を含め抱負を述べさせていただきます。

九州大学医学部附属病院等における心臓外科(徳永皓一教授)を中心とする約三年間の臨床研修を経て、昭和六十年四月、九州大学大学院医学研究科(第二生理学講座、野間昭典教授)に入学し、心臓電気生理学の研究を開始しました。ほ乳類心臓から酵素処理により得られた単離心筋細胞にパッチクランプ法を適用して心筋イオンチャンネル電流の解析を行ってきました。特に、心筋細胞において活動電位の再分極やペースメーカー電位の発生に重要な役割を演ずる遅延整流性カリウムチャンネルの活性化

皮膚科学講座
孟 憲民先生



生活しながら、夜遅くまで研究活動をしており、成果が期待されます。ベンガル語を学びたい方は、ご連絡下さい。(稲葉孝志 記)

略歴
一九八九年八月
大連医科大学臨床医学系卒業
一九八九年九月
大連医科大学
第一附属医院皮膚科入局
一九九一年九月
大連医科大学大学院入学
一九九四年一月
大連医科大学大学院
(修士、皮膚科学) 卒業
一九九四年二月
弘前大学医学部
皮膚科教室研究留学生
一九九五年四月
弘前大学大学院医学研究科入学
生年月日 一九六七・一・二二
国籍: 中華人民共和国
研究内容
一九九四年二月に来日し、最初の一年間は、日本語を勉強しながら皮膚科教室で臨床研修を行っていた。一九九五年四月から、本学大学院医学研究科に入学し、橋本教授と澤村講師の指導で、臨床研修とともに、医学研究を始めた。初めに分子生物学の基本操作技術を修得し、近年は、皮膚科領域の遺伝子治療に焦点を絞って研究を行っています。具体的には、現在臨床でもよく使用されているサイトカインに着目し、遺伝子組み換え法でサイトカインの

泌尿器科学講座
劉 星星先生



遺伝子発現ベクターを作成する。それらの発現ベクターを naked DNA 法でラットの皮膚に遺伝子導入し、その治療効果を皮膚局所や全身で検討するものである。今年一月には、研究論文が J.Clin.Invest. に受理され、高い評価を受けています。また、日本研究皮膚科学会をはじめ、アメリカ研究皮膚科学会及び日中皮膚科学会など国内外の学会にも積極的に参加し、演題発表を行っています。さらに、その功績が認められ、本年五月には、日本研究皮膚科学会より Dermatological Scientists の称号を授与されています。

略歴
一九八二年
湖南医科大学卒業
一九八二年―一九八七年
河南省開封市人民醫院
泌尿器科任員医師
一九八七年―一九九五年
湖南衛陽医学院第一病院
泌尿外科講師
一九九五年
弘前大学大学院
医学研究科入学(私費留学)
現在に至る
生年月日 一九六二・二・一〇
国籍: 中華人民共和国
研究内容
BCG の膀胱移行上皮癌に対する作用機序の研究を行っている。一年生の時、BCG に活性化されたリンパ球の抗腫瘍効果を in vivo で証明し、現在移植膀胱腫瘍に対して BCG 活性化リンパ球が有効か

研究中である。また、三年生の現在臨床研修外国人医師として病棟において臨床にも携わっている。
妻と息子と共に国際交流会館に住み、得意の日本語と英語を駆使し日中交流にも貢献している。



略歴
一九八一年
Mymensingh Medical College 卒業
一九八九年
弘前大学大学院医学研究科
泌尿器科学入学
一九九三年
同右修了
Long-term Results of
Therapeutic and Prophylactic
Treatment with Bacillus
Calmette-Guérin for
Superficial Bladder Carcinoma
(表在性膀胱癌に対する
Bacillus Calmette-Guérin の
治療効果の長期成績) に
て医学博士の称号授与
生年月日 一九五四・二・二二
研究内容
Ideal Diagnostic Complex (私立病院) において膀胱グラ
ディッシュに数少ない泌尿器
科医として勤務している。
在日中は主に新しい泌尿器
科的診療技術および最新の治
療器械について修得中である。

産科婦人科学講座
肖 宇紅先生



略歴
一九八八年七月
上海第二医科大学医学系卒業
一九八八年八月
上海第二医科大学附属
仁濟病院産科婦人科入局
一九九三年七月
上海第二医科大学附属
仁濟病院産科婦人科講師
一九九三年九月
上海第二医科大学大学院入学
一九九五年十月
弘前大学医学部
産科婦人科教室研究留学生
一九九七年四月
弘前大学大学院医学研究科入学
生年月日 一九六五・六・二五
国籍: 中華人民共和国
研究内容
一九九五年十月に国費留
学生として、弘前大学医学
部産科婦人科教室に参りま
した。最初の一年半の間に
は、日本語を勉強したり、
斎藤教授と藤井講師の御指
導で、子宮内膜症の発生と
免疫作用の関係について研
究を行いました。その研究
の成果は第五回国際子宮内
膜症学会及び第四回子宮内
膜症学会に発表され、良い
評価を得、その結果、上記
の国際学会の Young Scientist
という表彰を受けました。
一九九七年四月からは大学
院に入学し、斎藤教授と佐
藤助教授の御指導で、PCR in
situ hybridization など分子生
物学方法を用いて、Human
Papilloma Virus (HPV) 感染
と子宮頸癌発生との関係に
ついて研究を行っています。
すなわち、過去十年余の期
間内に uterine cervical
carcinoma in situ と診断された
患者(一三三例)の頸管塗
抹標本(Papanicolaou smear)
を実験材料とし、主として
PCR in situ hybridization 法より、

HPV の遺伝子が癌細胞内に存在するかどうかを検討しております。この研究の臨床的意義としては、通常の細胞診と同時に HPV 感染の有無を確認し、その結果を子宮頸癌の診断や、治療あるいは予防に役立てようとするものです。

麻酔学講座
ハーベジ・シン先生
(Harhej Singh, M.D.)



略歴
一九八五年にインドのデ
リー大学医学部を卒業し、
二年間のレジデント研修を
ニューデリーで修了後イギ
リスに移り、イーストバ
ーミンガム病院、ロンドンの
キングスカレッジ病院で研
修を積み、イギリス王立麻
酔指導医(DA)、アイルラ
ンド麻酔指導医(FEARS)
を取得されました。その後
米国に移り、一九九四年に
は米国麻酔指導医(ABA)
の資格を得て、米国テキサ
ス大学ダラス校で麻酔指導
医として臨床と研究に活躍
してこられました。
テキサス大学麻酔科と弘
前大学麻酔科は二十年にも
及ぶ長期間にわたって学術
交流を続けており、この間
多くの共同研究を行ってき
ました。昨年に引き続き二
度目の来日が実現しました。
研究内容
研究領域は臨床麻酔を中
心に多岐にわたっています。
現在は米国で行っていた「麻
酔深度に対する脳波学的ア
プローチ」の研究を当教室
で続行中です。

客員外国人研究者紹介

衛生学講座
劉 強先生



活性酸素種産生能からみた種々の環境下(運動、スポーツ、疾病等)での生体反応に関する研究に取り組んでいる。

寄生虫学講座
ナルギス・マフザ先生
チステイ・モイヌディン先生



寄生虫学講座の一室に軽度
に日焼けした男女二人の留學
生がパソコンと「にらめっ
こ」している。二人は日章旗

一九六三年中国東北地方の瀋陽に生まれ、一九八五年中国医科大学卒業後、同大学の附属病院に就職し以後十年間口腔外科および顔面形成再建外科の臨床研究を行った。一九九五年中国医科大学大学院修士課程を修了し、一九九六年一月日本政府国費外国人留學生として弘前大学衛生学教室に入局、一九九七年大学院に入学した。現在ヒト好中球

研究室研修座談会

本年度から四年目学生を対象として、基礎と臨床の研究室に小人数の学生を配属し、実際に各研究室で何が行われているかを体験させるとともに、研究に対する理解を深めさせることを目的として研究室研修が行われた。そこで学生諸君がどのように感じたかを聞く座談会を七月十日に開催した。座談会は延々四時間近く続き、熱い意見が交わされた(司会：佐々木睦男(第二外科)、蔵田潔(第二生理)、学生：学部四年六名)。

司会：本日はお集まりいただきありがとうございます。研究室研修は、本学部では初の試みということもあり、教官も学生も手探りというところがあつたようですが、今後のために大変参考になりますので、研究室研修の意義や問題点を自由に話し合ってください。

実施期間について

司会：四月から七月までの長期にわたって実施されましたが、この期間の長さについてはどのように思いますか？

学生A：研究結果を論文にまとめるまで進めることが目標なら、週四回午後のみ約三ヶ月行いうという現行の期間だけでは足りないと思います。しかし、研究室でどのように個別の研究が進められているかを理解する程度なら多すぎるように思います。どちらかにして中途半端のような気がします。少なくとも終日あるいは深夜に及ぶ実験があり、午後だけにすると終日も終日やるような編成にしてもよいのではないのでしょうか。

学生B：私はもっと長い方がよいと思います。私の行った研究室では、実験に必要な技術を習得するまでに相当の期間を要してしまい、実際にうまくデータがとれた期間が短くて、十分

な量のデータが得られなかったからです。

司会：大学によつては二、三ヶ月おち抜きでやつているところもあり、それなり成果があるようです。本学部はカリキュラムを変えたばかりですので、これをまたすぐに変更することはなかなか難しいと思いますが、いずれ見直しの機会もあると思いますので、そのときの参考にしたいと思えます。

各教室の受入れ人数について

司会：今回の研究室研修では基礎と臨床の個別テーマ毎に学生を受入れましたが、総テーマ数は大変多く、結果として各テーマには小人数の学生さんを受け入れることになりましたが、実際やつてみてどうだったのでしょうか？

学生C：学生の側では、研究室テーマと受け入れ人数に希望をとり配分を調整しましたが、調整は大変でしたが、大体希望どおりのところに行くことができました。

学生D：できれば一教官に一学生がつく方が、個々の学生のレベルに対応できるのではないのでしょうか。二人以上ついた場合、必ずしも協力できたわけではなく、一人の方が学生にとっても独立心や責任感がで

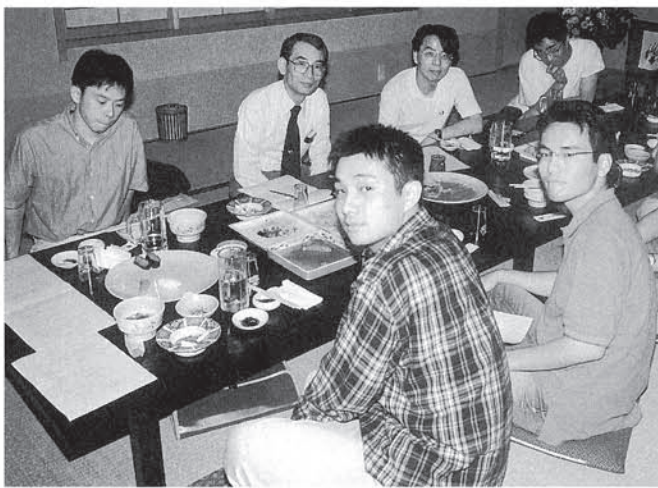
きてよいと思います。少なくとも、教官一人当たり、できるだけ小人数がよいと思います。

学生E：私の研修した教室では一人の学生に机・椅子・ロッカーまで用意してくれ、さらにパソコンや実験機器も整っていたので驚きました。

研究室テーマについて

司会：各研究室で行われる個別テーマを事前に資料として配布しましたが、実際にそれに即した研究ができたのでしょうか？

学生F：事前配布資料の内容では短すぎて、今回の研修の内容を前もって把握



することは不可能でした。私の行った研究室では、そのテーマに沿ってはいませんが、それにしても事前配布資料の内容を充実させる必要があると思います。本年度の資料では実際に何をやるのか、また、学生がどのように対応してもらえるかよく分かりません。もし可能なら事前に説明会を開き、教官と学生の双方が互いの生の声を聞くというような機会があつてもいいと思います。

学生B：中には、学生をとて受け入れられないような研究室があり、学生としても折角与えられた機会を生かすことができず、大変がっかりしました。もし受け入れられないのであれば、受け入れられないと言つてほしいと思います。

司会：臨床の研究室では、各教官が医師としての責務を果たしつつ研究もしているの、決められた時間に行うことができない場合もあります。しかし、それ以前に教官側も十分この研究室研修の意義や内容を理解していないケ

ースがありうるの、今後周知を徹底させるべきでしょう。研究の内容については如何でしたか？

学生E：研究の内容が専門的すぎて、やっていることの十分な理解ができな

いところがありました。研究室の割り振り後、事前に研究室内に何をするか聞きに行く機会がありますので、そのときに予備知識が必要ならその旨伝えてほしいと思います。また、なかなかデータが出にくい実験をやっていると、精神衛生上よくないところもあります。

学生C：実際にやつてみて、研究の内容については理解が深まりましたが、自らかアイデアを出すところまでには至りませんでした。

司会：研究はなかなかすぐには結果が出ないということが分かるだけでも成果があつたのかもしれない。しかし、できれば小づかみでも何か新発見が出るように、教官側も努力すべきでしょうね。

教官の対応について

司会：恐らく大半の研究室では個別テーマ毎にそれぞれを担当する教官が学生についていたと思いますが、教官は学生さんをどのように受け入れてくれましたか？

学生A：今回が初めてのことだったので止むをえないところもあるかもしれませんが、私の担当教官は研究室研修というものがどのようなものであるかという十分な理解を当初して

いたように思えます。教官は学生さんをどのように受け入れてくれましたか？

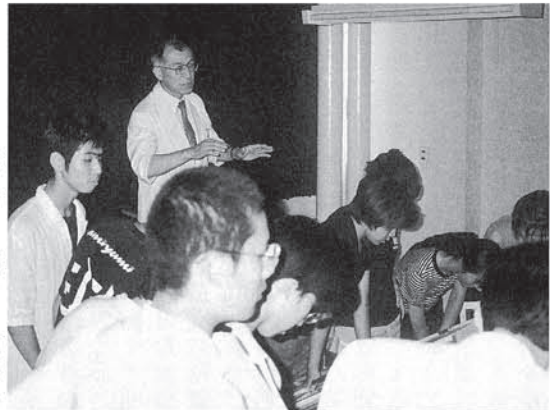
学生F：数は極めて少ないと思いますが、研究室によつては学生が相手にされ

学部説明会開催される

八月十八日十三時から医学部説明会が開かれ、高校生八十七人、引率教諭三人の参加があつた。今年は東北各県はもとより、千葉、東京、横浜、大阪からの参加者もあり、昨年に比べて大幅に増えた。当日は学部部長の挨拶に続いて、模擬講義、手術部・薬剤部・寄生虫学実験の見学などが行われた。参加者の多くは弘前大学医学部への進学を希望しており、説明会を経験して進学の希望と医学への情熱を一層強くしたとの感想が多かった。(佐藤 記)



寄生虫学実験を見学する高校生



手術場を見学する高校生

ない所が実際にありましたので、そのようなことがないようにしてほしいと思います。

学生C：研究よりも飲み会に多くの時間をとっているケースがあつたので、そのようなところに余り学生を巻き込まないでほしいと思います。

研究室研修を終わつての感想
司会：研修全体に対する感想をお聞かせ下さい。

学生B：初年度というところもあつて、いろいろこれから解決すべき問題点はありますが、私もこの研究室研修という制度は大変有意義だと思っています。

学生D：私もこの研修はあつた方がよいと思います。しかし、現状では研修の目的が明確でないケースが少なからずあり、各教官にはこの研修期間で何をどこまでするの、十分用意して

いただくと思います。やつてみたいテーマを出している教室を学生側としても選んでいるので、それに応えてもらいたいと思います。

座談会を終わって

研究室研修制度についての学生の感想は有意義であつたとの意見がほとんどを占め、この制度が幸先良いスタートを切つたと考えられた。今後、受け入れ側の教官の意見も参考にしながら、本制度の内容をより意義のあるものにする必要性を感じた。

学生の国際交流

本年も国際交流の一環として、外国の大学や医療施設への本学部学生の派遣、および外国からの学生受入を以下のように行った。本学部からの派遣学生は公募を行ったが、決定にあたってはカナダ国マニトバ大学オール教授による英会話の面接が行われ、いずれも英会話能力ありと認定されている。本年度はすべて女子学生の応募であったが、来年は男子学生を含む多くの

応募があることを是非とも期待する。なお、これらの国際交流のうち、ロシア国立極東総合医科大学については遠藤正彦医学部長みずからハバロフスクを訪問し、交流のあり方を討議されている。また三沢米軍病院については、学生のみならず看護婦の方々による医療現場での国際交流も行われるべく国際交流研究委員会が三沢米軍病院の責任者の方々と綿密な打ち合わせ

夏期国際交流

ロシア交換留学生来る

国際交流委員 八木橋 操六

八月五日より十九日までの二週間、ロシア・ハバロフスクよりスエトラナ・チュガエフスカヤ（愛称スエトラナ）さん、オルガ・クラスニコバ（愛称オルガ）さんが弘前に滞在し、医学部および大学病院を研修した。二人は、ハバロフスクにある極東医科大学の四年生で、今回は同大学と弘前大学医学部との交換留学生協定で訪れたもの。今年度は先んじて本学部から専門四の工藤香江さんがハバロフスクに十日間滞在し、極東医科大学で研修した。

今回来弘した二人は、医学部では薬理学のイヌを使った実験を見学するとともに、大学病院で第一内科での消化管内視鏡、第二内科での循環器疾患の診断と治

を行っている。

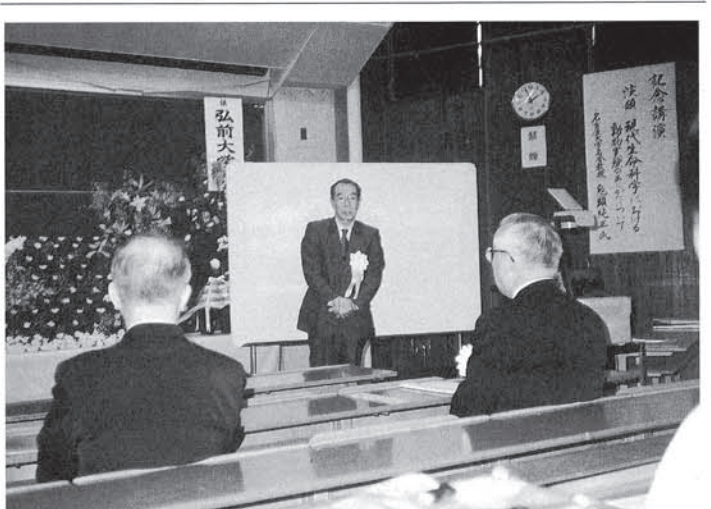
一、米国テネシー大学メンフィス校
派遣：谷 智恵
（専門課程四年）
（七月二十一日～八月二十五日）

二、ロシア国立極東総合医科大学
（ハバロフスク）
派遣：工藤香江
（専門課程四年）
（七月二十六日～八月五日）
受入：
（七月二十六日～八月五日）
（四年目学生二名）
（八月五日～八月十九日）
三、三沢米軍病院
（エクスターンシップ）
派遣：宮地 有理
（専門課程四年）
（八月三日～八月二十日）
（蔵田記）

動物実験 倫理委員会が 活動開始

近年、動物福祉の面から研究に使用される実験動物の取扱いが厳しくなっている。動物実験を用いた研究論文を投稿した場合、飼育法、実験法、実験終了後の処理等に関し、クレームがつけられる場合もある。

六月より書類審査が始まり七月末現在まで一〇六件の審査があり、慎重審議の後、一部申請者の説明が求められ、いずれも承認されている。



五月二十五日、医学部基礎講堂で動物実験慰霊祭が執り行われた。引き続き、鬼頭 純三名古屋大学名誉教授により記念講演「現代生命科学における動物実験のありかたについて」が行われた。

療、第三内科、神経内科領域での神経疾患の診断、検査など内科系領域に加え、臨床検査医学での各種近代機器を用いた検査、病理部での手術標本の診断を学んだ。さらに、外科系でも耳鼻科や第一外科での手術を見学、各教室での先生方とのディスカッションを通し、日本で現在行われている医療の実態について多くのことを学んだ。二人は現在医科大学で臨床医学を学んでいるところで、日本での進んだ内視鏡技術やPTCAなどに強い関心をもつて見学をしていた。



オリガ・クラスニコバさん（左）とスエトラナ・チュガエフスカヤさん（右）

今回の研修で、二人はちようどねぶた（ねぶた）祭り期間中に到着したことか、弘前大学の浴衣も付け、祭りに参加、その盛大なお

祭りを堪能したとのこと。一方、ウィークエンドには岩木山や日本海まで足を伸ばし、近郊での散策も楽しんだ様子である。

二人へ今回の滞在の感想を聞いたところ、今まで日本に抱いていたイメージはどちらかというと、人々はビジネスライクなものと思像していたが、それとは異なり、いろいろな先生方に親密にかつ懇切丁寧な接し方、素晴らしい印象を受けたとのこと。また、医学部が最先端の研究をめざし、また臨床も高度の技術を行っているところに大きく感銘を受けたという。将来はスエトラナさんは神経内科へ、オルガさんは耳鼻科方面を希望している。

機会をみてまた是非訪れたいとのこと。短い期間でまだ長く滞在したい様子であり、名残惜しさを残して青森空港から飛び立っていった。

なお、この紙面をお借りして、ロシア留学生滞在中に中大活躍してくれた、工藤香江さん、および医学部各教室の先生方、学務課研究協力係の森、瀬成田各氏に心からお礼申し上げます。

英国の医学教育 —フィリップ・エバンス氏の講演から—

学務主任 松木 明知（麻酔科）

六月五日MCCにおいてエジンバラ大学医学部医学教育カリキュラム開発部長フィリップ・エバンス氏の講演が行われた。

私が一九九七年にエジンバラ大学で行われたシンポジウムに参加した際、会長のアステア・スペンス教授（麻酔科）に御願いして、エバンス氏を紹介してもらい、滞在を一日延期して同学部の教育事情を教えていただいた関係で、今回氏を招請した。

英国では一九九三年に国を挙げて医学教育の改革を開始し、ガイドライン「Tomorrow's Doctors」を発表した。氏の講演はこの「Tomorrow's Doctors」が発表された背景について説明し、教育内容が過密になって学生が十分に消化しきれなくなり、これに財政的圧迫が加わって改革せざるを得なくなったと説明した。このためNational Health Serviceがカリキュラムを根本的に見直す教育の専門家を各大学の医学部に配置した。フィリップ・エバンス氏もその一人であった。この人たちがGeneral Medical Councilと議論を重ね基本的な十四項目の教育方針を提唱した。スペースがないのでこの十四項目を詳細に述べないが、第一に掲げられていることは「Reduce burden of factual information」、つまり単に教科書に書いてある事実を教えることをしないということである。医学の進歩に伴って事実が幾何級数的に増えていることから当然であり、すべての科目で、まず基本中の基本事項のみをしつかり理解させることが必須であるとした。

そのほか「Communication Skills」や「Man in Society」に力点が置かれている。前者は直ちに理解出来ると思うが、後者は社会の一員としての自覚を持たせることである。この改革で最も成功した大学はサザンブトン、ノッチングム、リバープールであり、中でもproblem-based learningを主体とした教育を行っているリバープール大学が秀れているという。患者の抱える「問題」を出発点として学生が自ら勉強する方法である。教官側もこの方法に慣れないため最初は必ずしも円滑には行かなかった。余談であるが実はエバンス氏はリバープール大学でこの改革に取り組んで成功したので、エジンバラ大学に引き抜かれた。

第二部はエジンバラ大学の学部教育についての講演が行われた。

ジャマイカ国南部地域 保健強化プロジェクト本格開始

—三田教授、斎藤講師ジャマイカへ—

実施に向け約一年半前から準備を進めてきたジャマイカ国南部地域保健強化プロジェクトが、七月から本格的にスタートし、第一次長期派遣専門家として公衆衛生三田教授と第二生理齋藤講師が七月七日離日した。このプロジェクトに対しては文部省からの正式な依頼文書も医学部長あてに送付され、JICA（国際協力事業団）の協力機関として文部省が正式に参加して実施されるプロジェクトとしては、今回の弘前大学によるものが初めてのケースとなった。

プロジェクトのスタートに伴い、遠藤医学部長を委員長とする国内委員会と、菅原教授（衛生学）を本部長とするプロジェクト実施本部も発足し、実施・支援体制も整備された。

三田・斎藤両先生の離日に先立って、六月二十四日にメデイカルコミュニケーションセンターにおいて激



励会が行われた。遠藤医学部長を初めとする医学部推進委員会メンバーによる激励の言葉に応え、三田教授、斎藤講師から決意の表明があり、多くの医学部教官の参加を得て、和やかに激励パーティーが行われた。岡先生は来年九月までにジャマイカに滞在され、主に循環器疾患の予防を中心とした保健強化プロジェクトの指導に当る。

(佐藤 記)

第21回
日本骨・研

野球部・東医体・全医体優勝!!
卓球部・東医体男子シングルス優勝!
ゴルフ部・東医体準優勝!

昨年はゴルフ部の優勝だけが際立つた東医体であったが、本年は野球部が優勝、ゴルフ部は連覇はならなかったものの準優勝、ラグビー部が三位、卓球男子団体三位、男子シングルス優勝（竹田哲司君）、女子シングルス二位（神谷恭子さん）などと弘大勢の活躍が目立った。野球部は福岡での全医体にも優勝し、卓球男子団体は宮崎での全医体でも三位になった。野球部四年生の戸川貴夫君よりの寄稿を紹介する。

第四十一回東日本医科学
生総合体育大会準硬式野球
の部は七月三十一日より、
東京大学主管のもと千葉市
を中心に二十九チームが優
勝を目指し開幕しました。
我が弘前大学の一回戦は日
本大学でした。弘大先攻先
発野村（二年生）で始まり

関節感染症

九会学術集会

れたものの三六―二という
大差で勝ちました。二回戦
の相手は関東医科リーグ一
位の千葉大学でした。この
試合も初回に五点を挙げる
などして計十二点とり、投
げては一年生の田中が見事
完封し一二―〇、五回コー
ルドで勝利しました。三回
戦は福島県立医大でした。
福島とは何度も練習試合を
してきて、互いの手の内を
知り尽くし、やややりにく
い相手でした。しかし、こ
の試合も初回から弘大打線

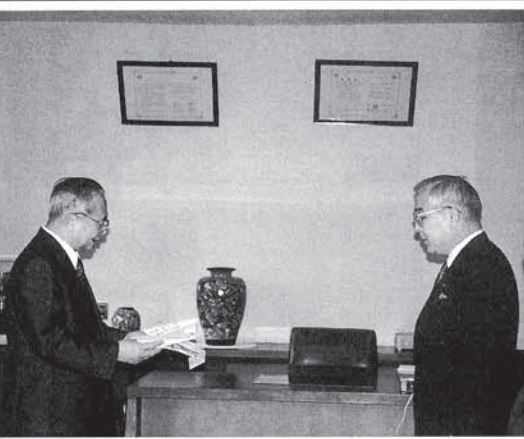
チャヤーに襲いかかり一挙五点をとり、試合の流れをよびこみました。先発は田中で、この試合も見事なピッチングで北大打線を完封してしまいました。結果一一〇、七回コールドで決勝に進出をきめました。決勝は昨年コールド負けを喫している新潟大学で、チーム一丸になって新潟に雪辱を果たすため、一年間頑張ってきたといっても過言ではありませんでした。先発は今年大会初登板の福地（四年生）でした。緊張からか二回に三点を奪われ、初めて追いつける立場になりベンチに嫌なムードが流れていました。しかし、四回に相手のエラーなどで二点を獲り、さらに、五回からマウンドにあがった田中の力投で弘前に流れを呼び込みました。そしてついに七回に一点を

青森銀行医学助成金（平成十年度）
井畑頭取より遠藤医学部長に贈呈

青森銀行（井畑明男頭取）と医学部は、昨年五月「青森銀行医学助成金」制度を創設し、七月八日に昨年に引き続き本年度の助成金の

贈呈式が医学部長室で行われ、助成金千五百万円が井畑頭取から遠藤医学部長に手渡された。

ては横山雄小児科学教授より、助成金を基に学内の十三講座で構成した臓器移植研究班を発足させ、骨髄、肝、腎の臓器移植に関する



た遠藤学部長は「本学での臓器移植研究などに活用させていただき、成果が上がっている。地元の期待にこたえられるよう研究を継続していきます」とお礼を述べた。井畑頭取は県民のための医療向上への弘前大学医学部に対する期待を語られた。

①拒絶反応②移植片対宿主反応③再灌流障害④遺伝子導入の四テーマ毎に研究チームを編成し得られた成果が報告された。平成十年度は参加講座を二十三に増やし、肺、関節、軟骨、脾、小腸の取り組む方向性を示された。

また九年度の助成金で設けた「メデイカルイングリッシュセンター(MEC)」については解剖学第一講座正村和彦教授から、MECでは医学論文の英語校閲や学会発表の口演英語の改善

を指導しており、九年度は教官や学生を中心に三十五件の利用があったことが報告された。青森銀行医学助成金が医学部の研究の活性化に貢献が大きいことが医学部長より青森銀行側に説明され、今後引き続きの支援を要望した。(棟方 記)

第21回 日本骨・関節感染症研究会

性について認識を深めた。また、日本整形外科学会の教育研修講演として本学細菌学教室中根明夫教授から「細菌感染症におけるサイトカインシステム」という最新の話題を、招待講演として台北大学の劉教授からは台湾における人工関節の術後感染とその対策についてのお話を頂き、会員に益するものであった。

した。この勢いに乗り、福岡で行われた全医体も初戦の久留米大学に四―二で勝ち、決勝は秋田に一〇―五で勝ち日本一の栄冠を得ることができました。これも三井監督のもと必死に頑張った選手と、それを支えてくれたマネージャーの努力、また野球部を応援してくださったOB、諸先生方の全ての力があって初めて成しえたことです。ここに改めて御礼申し上げます。また、来年も良い結果が残せるよう部員一同頑張って参りたいと思います。

コラム

医学部
こぼれ話

●臨床から転向した教授が基礎に多数いたこと、基礎教授会のお花見の二次会の帰り、ある教授が、とあるスナックの階段の上から下まで十数段ごりごり落ちた。並みいる自信のある教授は集まって頭をさすったり、「安静にした方がいい」と言ったり、種々手をつくしていた時、うしろの方で遠巻きにしていた新任の若い教授が大声で叫んだ「医

者を呼べ！」。●SGTを終了した学生が大学病院の中央廊下をゾロゾロ教室にもどるべく歩いていた。と、見舞客らしい人が突然フラフラと廊下のすみに倒れかかった。さすがに医者の卵のSGT学生、直ちにかけよって、脈をとったり、ひたいに手をあてたり。と、後ろの方の一人の学生がさげんだ「救急車をよぼう」。

人事異動

●医学部
辞職

10・7・31
耳鼻咽喉科学助手
石井 賢治
〈八戸市立市民病院〉

10・8・31
形成外科講師
田中 一郎
〈済生会宇都宮病院〉

採用

10・8・1
脳神経外科助手
木村 正英
〈十和田市立中央病院〉

昇任

10・8・1
眼科学助教授
松橋 英昭
〈医学部講師〉

転任(転入)

10・7・16
外科学第二助手
清藤 大
〈国立療養所松丘保養園〉

配置換(転入)

10・7・1
産科婦人科助手
横山 良仁
〈附属病院助手〉

派遣

10・7・7
公衆衛生学教授
三田 禮造
〈ジャマイカ国〉11・9・30

生理第二講師

齋藤 和子
〈ジャマイカ国〉11・9・30

●附属病院
辞職

10・7・31
脳神経外科助手
長谷川聖子
〈黒石病院〉

10・8・31
第三内科助手
尾崎 勇
〈板柳中央病院〉

配置換(転入)

10・7・1
産科婦人科助手
船橋 大
〈医学部助手〉

休職

10・7・16
集中治療部助手
櫛方 哲也
〈期間更新〉11・3・31

●事務

10・7・1
事務部長
佐橋 正昭
〈秋田大学医学部管理課長〉

宇野良治助手 (第一内科)
「アメリカ消化器内視鏡学会-1998-
Audio Visual Award」受賞



一九九八年五月十七日より二十日までアメリカ・ニューヨークで開催されたアメリカ消化器内視鏡学会で、本学第一内科の宇野良治助手がAudio Visual Awardを受賞した。学会期間中に消化器内視鏡の新技术の修得などの教育的目的で

Learning Centerが開設され、ビデオが公募されるが、今年度応募した四十二本のビデオの中から最優秀賞に選ばれた。受賞した演題名は「Non-lifting sign for invasive colorectal cancer」であるが、現在迄に同グループが発表していたビデオをビデオ化したものである。内視鏡的切除の適応を決めるサインであり、Non-lifting sign (病変部の粘膜下に生食を注入した際、病変が隆起しない所見)は、現在では弘前を発信地とする国際的な医学用語になっている。(棟方 記)

基礎ソフトボール大会
ー衛生・公衆衛生・寄生虫連合チーム優勝ー

		(得失点差)
優勝	衛生・公衆衛生・寄生虫連合	4勝1敗(+32)
準優勝	第一生理・第二生理・薬理連合	4勝1敗(+25)
第三位	細菌・法医・病態生理連合	3勝2敗(+14)
第四位	第二生化・第二病理連合	2勝3敗(-4)
第五位	第一生化	2勝3敗(-4)
第六位	事務部学務課	0勝5敗(-63)

- ★最優秀選手 川口 将(公衆衛生)
★優秀選手 三木いづみ(薬理)

基礎教職員・事務職員・大学院生が参加し、恒例の第二十回医学部長杯争奪ソフトボール大会が、六月八日から七月十日にかけ、昼休み時間に、南郷グラウンドで行われた。今年は六階連合チーム(衛生学講座・公衆衛生学講座・寄生虫学講座)が優勝した。全試合が終了した七月十日午後五時から医学部会館で、表彰式が執り行われ、優勝チームに医学部長杯が渡された。その後は試合の熱戦にも劣らず、賑やかに打ち上げが行われた。

	1 6階連合	2 細菌法医病態	3 4階連合	4 1生化	5 学務事務	6 2生化2病理	得点	失点	得失差	イング 平均	勝敗
1 6階連合		6月1日 15-6 ○5	6月8日 7-10x ×5	6月19日 7-6 ○5	6月29日 20-1 ○5	6月25日 7-1 ○5	56	24	32	25 1.280	4勝1敗 優勝
2 細菌法医病態	6月1日 6-15 ×5		7月1日 5-6 ×5	7月10日 10-8 ○4	6月30日 19-1 ○5	6月24日 8-4 ○5	48	34	14	24 0.583	3勝2敗 3位
3 4階連合	6月8日 10x-7 ○4	7月1日 6-5 ○5		6月26日 17-2 ○3	6月22日 14x-2 ○4	6月9日 1-7x ×5	48	23	25	21 1.190	4勝1敗 準優勝
4 1生化	6月19日 6-7 ×5	7月10日 8-10 ×5	6月26日 2-17 ×3		7月9日 13-4 ○5	7月2日 6-1 ○5	35	39	-4	23 -0.174	2勝3敗 5位
5 学務事務	6月29日 1-20 ×5	6月30日 1-19 ×5	6月22日 2-14x ×5	7月9日 4-13 ×5		6月17日 5-10 ×5	13	76	-63	25 -2.520	0勝5敗 6位
6 2生化2病理	6月25日 1-7 ×5	6月24日 4-8 ×5	6月9日 7x-1 ○4	7月2日 1-6 ×5	6月17日 10-5 ○5		23	27	-4	24 -0.167	2勝3敗 4位



表彰式、優勝した衛生・公衆衛生・寄生虫連合チームに
土田教授から賞状が手渡される

Cutting Edge

— 弘前大学医学部における

論文発表状況のその後 —

日本の医学部、医科大学の論文発表ランキングに関する慈恵医大山崎茂明氏の二度目の調査（メディカル朝日一九九五年）から五年を経た。必ずしも高い評価を得られなかったが弘前大学医学部の、その後の活動を評価することは興味深いことであり、また今後の在り方を考えるための一要素であるとするには多くの賛同を得られるものと思われる。以下、北海道・東北地方の九大学医学部の論文発表に関するその後のランキングを調査した。

論文発表数

一九八八年上半期のMedlineデータベースに収録されている各医学部から発表された英文論文数と、それに基づくいくつかの指数を表にまとめた。調査は全て山崎氏の既報の方法を踏襲した。収録論文数を見ると、弘前大学医学部は北海道・東北の九大学部中七位にランクされ、この順位は五年前の調査結果と同じである。五年前に比べて、弘前大学医学部からの発表論文数は五割増加している。これは、福島九割増、岩手八割増、秋田六割増などに続く数字であり、全般的に見て、五年前に比べて上下の差が縮まっていることが判る。東北大学医学部の場合、約四割減少しているが、講師以上教官一人当りの論文数を見ても、一九九三年の山崎氏による数値の正確さに疑問が持たれる。（これに関しては、一九九三年上半期のMedlineデータが手元に無い現状では既実証不可能である）。しかし、北海道・東北地域における東北大学の優位は揺るがず、以下に述べるインパクトファクターの点からは、東北大学からの発表論文は、数よりもインパクトの高いものを指向しつつあるのかも知れない。

インパクトファクター

論文一編当りのインパクトファクターの平均値を見ると、弘前大学からの発表論文の質は他大学と肩を並べていると言える。この点では東北大学が抜きん出ているが、上述のように、より質の高い論文への指向が反映しているのかもしれない。論文当りのインパクトファクター平均値の面からは、弘前大学の現況は是認されるものと思われるが、インパクトファクターは研究活動評価の一面であり、なにより、これは平均値に過ぎない。しかし、弘前大学から発表される論文の質は、他に比べて決して低いものではないことだけは間違いない。

科研費交付額との関係

九医学部に対する平成十年度科研費交付額（中根教授による記事参照）と発表論文数との相関関係を調べると、一九九三年のMedline収録英文論文数との間の相

関係数は+0.971で極めて高い相関が見られた。一九九六、一九九七、一九九八年論文数との相関係数はそれぞれ、+0.985、+0.986、+0.915で、いずれも高い数字を得た。この数字だけから見ると、数年前の論文数が科研費交付額に強く反映していると言えるのかも知れない。

検索結果の意味するもの

Medlineによる論文検索にはいろいろな問題点があり、施設毎或いは研究者毎の評価の場合は特に困難を伴う。検索の際の諸問題に触れることは本文の主旨ではないので省略するが、上述の通り、山崎氏による一九九三年の東北大学のデータには誤りがある可能性が大きい。今回の検索では、十分正確を期したこともあって、全国の医学部、医科大学を網羅するに至らなかった。限られたデータではあるが、現状を正確に把握し、北海道・東北地域における水準を目指した当面の努力の目安にすることは可能と思われる。幸いこの中には、日本全体でも上位にランクされる東北大学や北海道大学など、目標とすべき大学も含まれる。

まとめ

弘前大学医学部の論文発表は、かなり低いところからランクされていたと考えられる一九八九年の状況（科学一九九一年）から、近年着実に向上していることは間違いない。しかし、現状は自ら容認すべきものではなく、向上しつつある現在の状況を維持していくことが求められる。そのためにこのような調査を続けることも無意味ではないと思われる。

（佐藤 記）

弘前大学医学部 学術賞公募始まる

平成八年度に創設された学術賞は今回で第三回目を迎えた。八月一日より公募が開始されたが、八月二十六日現在における申請状況は奨励賞一件、特別賞〇件である。公募締切は九月三十日となっているので多数の応募を期待している。申請件数が少ない場合には公募が延長されることもありうる。学術賞特別賞は四十五歳以下の研究者で、最近数年間に学術雑誌に発表された数編の論文を対象として、その獨創性、完成度、一貫性などが審査される。学術賞奨励賞は学部卒業後十年以内の研究者で、最近二年間学術雑誌に発表された一編の論文を対象として、その獨創性、発展性などが審査される。また、審査対象の論文はすべて別刷を提出しなければならない。一部では受賞者に研究の経済的援助をとの声をあげる。しかし、現時点では優れた研究業績をあげている研究者の顕彰により、当医学部における研究水準の向上を目的としているため経済的援助までは考えられていない。

（新川 記）

編集後記

今年の天候は春から異常続きで、桜の記録的な早咲き、雨に見舞われたネプタ祭り、梅雨明け宣言のない夏、集中豪雨など例年になくことばかりである。社会情勢についても世界的な異常気候や不況等の暗いニュースが多く、これ等の事態はいずれも連動し、悪循環に陥っている様に思われる。異常気候はともかく、後者の要因の多くは官民を問わずこれまでの体制が時代の変化の波に対応できなくなった結果であり、日頃より少しずつでも改善に向かって進む努力を怠ったためではないだろうか。

当医学部においては、今後予想される社会情勢の変化に対し、現在改革が急ピッチで実施されつつある。このような改革をより実効のあるものとするには、教職員および学生が、それぞれの立場から明確な意識を持ちながら対応することが重要である。

幸いにして、本学部の動きがより良い方向に向かっていることは紙面よりその一端を知ることができると思うし、また、それに関連する記事を積極的に取り上げて行きたいと思う。明るい話題が多いと編集に携わる側にとっては紙面の仕上がりが早く、編集者にとつてはより明るいことである。

本号から学内の著名人より寄稿頂いたショートストーリーを「医学部こぼれ話」として数回に亘り掲載予定である。この欄を御一読され、読者にとって少しでも気分転換の薬となれば幸いである。

（佐々木 記）

医学部	論文数*		講師以上教官当り論文数**		1998年論文当りインパクトファクター
	1993年	1998年	1993年	1998年	
弘 前	28	42	0.42	0.64	2.070
旭 川	40	54	0.82	1.13	2.166
北海道	83	109	0.90	1.59	2.039
札 幌	70	82	0.99	1.04	2.181
岩 手	15	27	0.18	0.36	1.169
秋 田	32	51	0.60	0.93	2.011
東 北	172	109	1.54	1.22	2.425
山 形	37	44	0.75	0.79	1.873
福 島	16	30	0.28	0.58	1.565

*：1993、1998年の1月から6月までのMedline収録英文論文数。

**：1年当りに換算（論文数×2／教官数）。

1993年のデータは山崎氏による。